

『異邦人』の創作過程をめぐって

古野, 千恵

<https://doi.org/10.15017/9222>

出版情報 : Stella. 26, pp.151-164, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『異邦人』の創作過程をめぐって

古野千恵

周知のように『異邦人』の内容・構造については盛んに論じられてきたが、作品の創作過程が考察されることは総じて少なかった。ロジェ・キーヨが1962年に独自の見解を示して以来、ここ半世紀ちかく『異邦人』の生成研究は大きな進展を見せていないというのが実状である¹⁾。何よりも関連資料の不足がその決定的要因といえよう。たしかに『異邦人』には2種の草稿が存在するが、そのいずれもが幾度も推敲をへて重層的にできあがったものではない。それゆえ、たとえ草稿の調査によったとしても生成過程を解明するのはきわめて困難とされる。だが本稿ではあえてこの問題をとりあげたい。従来諸説それぞれに不十分な点が見出されることに着目し、それらの指摘・原因解明をおこない、あわせて『手帖』に記された『異邦人』の先行テキストと書簡や伝記的事実とを照合することで、創作過程について再検討をこころみる²⁾。

1. 先行研究

本節では、出版前の『幸福な死』の原稿にも目を通したロジェ・キーヨと『異邦人』の生成過程とその源泉を分析したピエール＝ジョルジュ・カステックス、そして昨年出来の新プレイアッド版で『異邦人』の解題を執筆したアンドレ・アブーの3者の見解をとりあげたい³⁾。

まずはキーヨの説。彼はプレイアッド版の『異邦人』解題において、『幸福な死』と『異邦人』とを対比しながら『異邦人』の生成過程について推論している。以下、その推論を要約すれば——。カミュは1935年から38年まで『幸福な死』を手がけていた。作家の当初の意図は、36年1月の『手帖』メモ11「人はイメージによってしかものを考えない。哲学者になりたいのなら、小説家になりたまえ」⁴⁾に要約される。このことから、カミュは『幸福な死』を36年

に着想, 37年に完成した後, 次の作品の準備に入ったと考えられる。じじつ37年4月には『異邦人』の主要テーマのひとつが現れ, 同年6月には『異邦人』のライトモチーフのひとつ〈死刑囚と司祭の挿話〉が現れる⁵⁾。また, カミュが自分との会談で『異邦人』の出発点だと言明しただけに, 2カ月後の8月に書かれたメモ110はとりわけ重要である――

通常人生を見いだすところ(結婚, 就職など)に人生を求めているある男が, 突然モードのカタログをめくりながら, どれほど自分が人生(モードのカタログのなかに見いだされるような人生)に無縁な存在だったかに気がつく。

第1部: それまでの人生。

第2部: 演技。

第3部: 妥協と放棄と自然のなかの真実。⁶⁾

以上を勘案すれば, 『幸福な死』から『異邦人』への過程については, 「1937年の数カ月の間にカミュは〈カタログのような人生とは無縁の男〉(メモ110)が小説のテーマだと自覚した。たしかにこのテーマは『幸福な死』と共通する点はあるが, 次第に独立した作品として『異邦人』へと発展した」⁷⁾。そして, 38年までは『異邦人』にかんする纏まった構想は認められないものの, 38年5月から40年2月まで次第にこの作品にかかわるメモが増えていき, 同年5月『異邦人』は完成した。以上がキーヨの推論である。

しかし彼の推論には明らかな矛盾がある。まずは, 1935年から『幸福な死』に取りかかっていたと予め明言しているにもかかわらず, 着想時期は36年と述べる点である。また37年8月のメモが『異邦人』の出発点であるというのも疑問である。なぜならば, メモの内容と『異邦人』のそれが結びつかないからである。まず主人公ムルソーは, もとから結婚や仕事に人生の価値を求めておらず, 最初からカタログで見いだされるような人生とは無縁の存在である。くわえて, 第2部と第3部の構成は, 『幸福な死』の構想とまったく同一なのである。これらから, 1971年に『幸福な死』の校訂者ジャン・サロッキが「メモ110は『幸福な死』のためのもの」と指摘したように⁸⁾, 同メモが『異邦人』のテーマとして記されたとは思えず, カミュの発言は作品名の取り違えの可能性が大きい。さらに, キーヨが『異邦人』の出発点を1937年夏に定め, 『幸福な死』が同年前半に書き上げられたと判断している点についても納得しかねる。たし

かに『幸福な死』は37年にいったん書き上げられた可能性はあるが、同年9月22日に『幸福な死』という言葉ではじまるメモ142が現れることを考慮すれば、この時期はまだ『幸福な死』の推敲段階だったと考えるほうが自然であり、次の作品の準備に入っていたかどうかは推測の域を出ない⁹⁾。また、キーヨが取り上げた37年4月のメモ64と同年6月のメモ73についても、カミュが新たな作品の構想を念頭に書いたものなのかどうかを再検討する必要がある。以上の点から『異邦人』の出発点は、少なくとも37年8月とは言えないのではあるまいか。

つづいてカステックスの説に移ろう。カステックスは、キーヨの『異邦人』解題を基に作品の成立過程を論じている。彼はまず、1937年8-9月にカミュが結核の治療のためにアンブランに滞在していた事実に着目する。当地滞在はカミュにとって精神的動揺と身体的危機に満ちていたが、創作面においては実り豊かな時期だった。というのも長い間未完のままだった『幸福な死』が明確な形をとっただけではなく、『異邦人』の着想も生まれたからだ、とカステックスは言う。その根拠については、メモ110を引用しながら次のように説明する——孤独になったカミュは療養生活のなかで、社会的習慣に順応することの虚しさを以前にもまして強く認識し、今までは演技をして他人と付き合ってきたことにも気づいた。そしてこのことが作品のテーマへとつながっていった、と。つづいてカステックスは『手帖』を引用しながら具体的に『異邦人』創作の過程をたどる。まず、1936年4月のメモ36に記される「トラックの後を追いかけて飛び乗る若者」のエピソードが『異邦人』第1部第3章で使用されていることや、37年のメモ64および73から、『異邦人』の登場人物や事件などの概要がすでに同時期に形作られていたと考える¹⁰⁾。また38年に入ると、『異邦人』といっそう直接的にかかわるメモが認められるようになり、同年12月にはすでに作品の最終章が予見されると述べる¹¹⁾。そして39年から40年までのメモは、1938年に記された様々なメモの補足的役割を果たし、小説の挿話として構成されていったという見解にいたる。以上をまとめるとカステックスの説は、『異邦人』につながる発想はごく初期の段階から生じていて、『幸福な死』の執筆と『異邦人』の構想はほぼ同時期になされたというものである。

しかし、この説にも問題点がある。まず36年のメモ36は、はじめに『幸福な死』に使用されたものなので、このメモをもって『異邦人』の発想がすでに

生まれていたとは断じられない¹²⁾。またカステックスは『幸福な死』と『異邦人』の類似性を強調し、2作品の執筆時期が極めて近いことを暗に指摘するが、両作品に共通するのは、トラックを追いかけるエピソードと日曜日のエピソードのふたつにすぎない。たしかに主人公の名前や登場人物について類似点が認められるが、両作品のテーマや内容には大きな隔りがある。また、『手帖』を見るかぎり、37年の夏ごろにカミュが手がけていた小説は『幸福な死』であり、新たな小説のテーマが現れたり、『異邦人』に着手したような形跡はみあたらない。さらにジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシが指摘するように、小説家になる前のカミュが戯曲やエッセイは容易に書けても、小説の場合はそうではなかった事実を思えば、小説2作品を並行的に執筆していたとは考えにくい¹³⁾。これらの点を勘案すれば、『幸福な死』の挫折が一種の契機となり、新作品の構想が生じた可能性が高いのではあるまいか。

最後に、昨年出版された新プレイアッド版で『異邦人』解題を執筆したアンドレ・アブーの説を検討しよう。アブーはキーヨやカステックスの説には言及していないが、両者とは異なる創作過程を提案する。彼は着想時期については言明を避けるが、カミュが1938年5月に兄リュシアンと共に訪れたマランゴの養老院での体験が『異邦人』へとつながる物語として結実したと述べる。そして、39年2月までカミュは『幸福な死』の書き直しを試みるが最終的に出版は断念し、『異邦人』における「通夜」のエピソードを膨らませることから次なる仕事に着手したと論じる。また、カミュが同年7月25日にクリスチアーヌ・ガランドに「小説を書くつもりだ」と述べたことをとらえて¹⁴⁾、同時期にはカミュが『異邦人』の創作準備に入り、小説の第1章を最終稿の形、あるいは暫定的な形で書いていたと推論する。さらにアブーは、『異邦人』が形作られたのはカミュが編集長を務めていた「ル・ソワール・レピュブリカン」紙が発禁処分を受けた40年1月以降であり、第1部第1章については41年6月2日付パスカル・ピア宛書簡にもとづき¹⁵⁾、1940年パリで執筆されたと考えるのである。

アブーの資料照合は納得できるものであり、彼の提示した『異邦人』の創作過程に大きな破綻はない。しかしながら、1939年夏には『異邦人』第1章を「最終稿の形、あるいは暫定的な形」で書いていたとの指摘には無条件に同意することはできない。というのも、何らかのかたちで創作準備に入っていたかもし

れないが、この時期に作品の第1章が書かれていたかどうかは、推測の域を出ないからである。

2. 『異邦人』の先行テキストと着想過程

キーヨとカステックスの説は、いずれも一次資料の照合の点で万全ではない。そこで、『異邦人』にかかわる『手帖』メモをとりあげ、それらが記された時期と『幸福な死』とのかかわりから作品の着想過程を検証する。ちなみに『異邦人』にかかわるメモは14編あるが、このうち3篇は『幸福な死』ともかかわりがある。では、さっそくこれら14編のメモと作品の関係を、以下の表にもとづき見ていこう――

	『手帖』	『異邦人』	『幸福な死』
①	36年4月, N° 36「トラックの後を追いかける若者」	第1部第3章	第1部第2章
②	37年4月, N° 64「自らの正当化を望まない男」	『異邦人』のテーマ（ムルソー像）	
③	37年6月, N° 73「死刑囚と司祭」	最終章のエピソード	
④	37年8月, N° 110「モードのカタログのような人生とは無縁の男」	（カミュの証言による） 『異邦人』のテーマ	第2部と第3部の覚書は、作品の構想と同じ
⑤	37年12月, N° 174「前途有望だったが、今では会社勤めをしている男」	第1部第2章：日曜日のエピソード	第1部第2章：日曜日のエピソード
⑥	38年5月, N° 199「養老院で死んだ老女」	冒頭のエピソードの原形	
⑦	38年8月, N° 233「アラブ人娼婦とその情夫R」	レイモン・サンテスのエピソード（第1部第3章）	
⑧	38年8月, N° 235「養老院（野原を横切る老人）・埋葬」	冒頭のエピソードの原形	
⑨	38年8月21日～11月, N° 247「母親の死と葬儀・埋葬」	冒頭の文章と第1部第1章でほぼそのまま使用	

⑩	38年12月, N° 273「死刑囚のモノローグ」	最終章のエピソード	
⑪	39年4月, N° 294「喧嘩について話す男」	レイモン・サンテスのせりふ(第1部第3章)	
⑫	39年4月～7月13日, N° 308「養子を虐待した男」	サラマノの人物像	
⑬	40年2月, N° 492「老人と飼犬, ある男の口癖」	サラマノとマッソンのエピソード	
⑭	40年3月, N° 498「トルーヴィルの描写」	第1部第6章の海辺(マッソンの別荘)の描写	

まず最初に取りあげるのは、表の①と⑤である。メモ36の若者がトラックを追いかけて飛び乗るエピソードは、『幸福な死』第1部第2章と『異邦人』第1部第3章において使用される。またメモ174「日曜日は遅くに起きて、窓辺にすわって雨や太陽、通行人や静まりかえった通りを見て」過ごす男は、『幸福な死』と『異邦人』のそれぞれ第1部第2章において、主人公にまつわるエピソードとして使用される¹⁶⁾。つまり、いずれの場合も『幸福な死』で使用したものを『異邦人』にも利用したということなので、このふたつのメモは『異邦人』の先行テキストではあるが、作品の着想過程で記されたものではないと判断できる。つづいて表の②のメモ64を見てみよう――

物語――弁明を望まない男。人が勝手に作りあげる観念のほうが、彼には好ましい。自分の真実を意識しながら、独りで死んでいく――慰めの虚栄心¹⁷⁾

このメモはまさにムルソーに当てはまる人物像であり、『異邦人』のテーマに符号する。そこで注目したいのは直後のメモ65である。ここにカミュは自分がすべきことを6つ箇条書きし、「4) 小説――着手すべし」¹⁸⁾と記しているが、この小説とは『異邦人』のことなのか。そうではあるまい。メモ64の前をみると、36年1月以来『幸福な死』のメモが間断なく記され、それ以後を見ても同様であることから、「小説」とは『幸福な死』を指すと判断して差し支えないだろう。よってメモ64は、結果的に『異邦人』のテーマとなったが、もとは『幸福な死』のために記されたものと考えられる。

つづいて表の③に移ろう。メモ73「死刑囚のもとに司祭が毎日訪れる。死刑囚は処刑の恐怖から神の名を叫びそうになるが、そのたびごとに安易な救いを嫌い、恐怖心を嘔み締めて抵抗する。彼はひとことも言わず、目にいっぱい涙をためながら死んでいく」¹⁹⁾は、たしかに『異邦人』の最終章につながるエピソードではあるが、これもまた『異邦人』のために書かれたわけではないと思われる。その根拠として、「死刑囚」のエピソードは決定稿でこそ使われなかったが、当初から『幸福な死』の構想にあったことが挙げられる²⁰⁾。またメモ73を記した約半年後の1937年7月26日、カミュはジャック・ウールゴンに「僕は書くことを要求するあらゆる——密かで激しい——情熱のゆえに書きたいのです」と打ち明け、翌月から療養生活に入るが、休養中カミュは「自分の小説(『幸福な死』)のことを考え始め」、「まるで樹液が流れ出るように物語がこみあげ」てきたという²¹⁾。このふたつの事実から勘案すると、この時期のカミュの関心事は『幸福な死』の執筆だったことは明らかであるので、メモ64もおそらく『幸福な死』に使用することを想定して書いたものであろう。つづく表の④、メモ110については、キーヨ説を検討したさいにその内容が『幸福な死』に近いことをすでに指摘したが、さらに補足したい。37年8月付のメモは全部で20編あり、そのうちメモ110をのぞいた8編が『幸福な死』に関連するものである。しかも、この8編すべてがメモ110の後に記され、なかには『幸福な死』の計画案や構想を記したメモも4編ある²²⁾。つまりこの時期の『幸福な死』は、まだ小説の骨組みが鮮明ではなく、依然として完成の域には達していないので、このメモは『幸福な死』の構想案のひとつだったと見なすほうが自然なのではあるまいか。

以上5編のメモは、そのすべてが『異邦人』着想以前のものと考えられる。したがって、少なくとも1937年の段階では『異邦人』はまだ着想されていないかといってしまうだろう。では38年以降はどうか。1938年に入ると『幸福な死』はひとまず書き上げられたようで、カミュは原稿をジャック・ウールゴンに見せるが、小説の弱点を指摘され「まるでモンテルランの亜流のようだ」と批評される²³⁾。同様にジャン・グルニエにも原稿を送ったが、同年6月18日付のグルニエ宛書簡を見れば、この師が下した評価は容易に推し量ることができる——

この本を書くために、おおいに苦労しました。事務所から帰ると毎日数時間書きました。〔…〕私としても今の生活が不本意であることは、言うまでもありません。だからこそ私はこの小説を重要視していたのです。間違っていたのかもしれませんが。しかしあなたのお手紙を読んだあとは、途方にくれました。ただ、新たな仕事に取り掛かる前に、ひとつ教えていただきたいことがあります。〔…〕あなたは本当に私がものを書き続けるべきだとお考えでしょうか。²⁴⁾

グルニエがいかなる助言をカミュに与えたかは推測の域を出ないが、『幸福な死』を書き直すきっかけになったことは間違いないようで、じじつ、ハーバート・R・ロットマンによると、カミュは『幸福な死』の完成度は今ひとつであると自覚し、38年夏は書き直しに取りかかっていたという²⁵⁾。このような状況をふまえて当時のメモを見ていこう。

まずは表の⑥、38年5月のメモ199について。ここには「養老院で死んだ老女」の話が記されており、細部の設定は異なるものの「葬列に追いつこうとする老人」、「鼻に出来物ができた看護婦」など、『異邦人』第1部第1章で登場する人物についても記されている。このメモはもちろん『異邦人』のためのものであるし、たしかに同時期のカミュの体験が作品の着想源となった可能性はある。しかしながらカミュが新作品の着想としてこのメモを記したかどうかは疑わしい。というのも、この時期には小説の計画らしきものがまだ現れていないからである。また、直後の『幸福な死』のために」と記されたメモ200、メルソーがセレストの店で酒を飲んでいる場面が書かれたメモ201、そして「夏の予定。〔…〕小説『幸福な死』を書き直すこと」と記されたメモ202、さらに『幸福な死』で用いることを狙ったメモ204が後続することを思えば、カミュが『幸福な死』の修正を念頭においていたことは疑えまい²⁶⁾。なるほどグルニエ宛書簡からは、カミュが次作に向けて始動しようとしていたこともうかがえるが、なによりもまず『幸福な死』の推敲・完成が念頭にあったに相違ない。ゆえに、メモ199は『幸福な死』に加える新たなエピソードとして書かれた可能性も捨てきれないのである。では3カ月後の38年8月のメモ233とメモ235についてはどうだろう。これらのメモの間には、「テーマ——死の世界。悲劇的作品、すなわち幸福な作品」と題された『幸福な死』のためのメモ234があり、後には『異邦人』のマリー・カルドナ、および『幸福な死』『異邦人』のいずれにも現れない4人の「登場人物」たちが記されたメモ236がつづく²⁷⁾。

メモ 233 は、『異邦人』第 1 部第 3 章でのレイモンとその情婦にかんするエピソードの原型であるし、メモ 235 は再び養老院と埋葬に関するものなので、次第に新作の構想が固まってきている観はある。しかしながら、メモ 234 からは依然として『幸福な死』の推敲が続いている様子もうかがえるし、メモ 236 を読むかぎり、推敲過程で生まれた新たな着想と『幸福な死』との融合を試みていた可能性も捨てきれない。したがって、これら 2 編のメモはおそらく新作の着想過程で記されたと考えられるが、構想そのものは具体化しておらず、『幸福な死』との境界も曖昧である。だが表の⑨に注目しよう。メモ 247 が記された時期については、38 年 8 月から 11 月までの間としかいえないが、ここには「今日ママが死んだ。あるいは昨日かもしれないが、僕にはわからない」という『異邦人』の冒頭文がほぼそのまま記されているだけでなく、「葬儀」と「埋葬・葬列」の場面も記されており²⁸⁾、第 1 部第 1 章の主要エピソードがほぼ揃った形になる。他方、38 年 12 月から 39 年 2 月までの間は『幸福な死』の推敲メモがない状態がつづき、同年 3 月のメモ 288 が最後の関連記述であることから見て、カミュはこの時期に『幸福な死』の出版を断念したようである。したがって少なくとも 38 年 11 月ごろには、新作の構想がある程度具体化したものと思われる。よって表の⑩～⑭、すなわち 38 年 12 月以降の 5 編のメモも、『異邦人』の構想がほぼ固まった頃に記されたと見なして問題ないだろう。

以上の考察から、『異邦人』の着想過程にかんしては次のように推測することができよう。まず、着想時期そのものを特定することは難しいが、少なくともカミュは 1938 年夏ごろから新たな作品を漠然と意識し始めた。当面は『幸福な死』の完成と出版が最優先事項だったが、同作が 39 年初めごろまで推敲が重ねられたものの結果的には断念されたのと入れ替わるように、38 年末ごろから新作『異邦人』の構想が次第に具体化し始めるのである。

3. 執筆時期の推定

カミュは『幸福な死』にたいする批評に落胆していたものの、1938 年 4 月に新たな決意ともとれる言葉を書きとめている——「たったひとつのことを考えるのに 2 年かけても一生のうちではたいしたことはない」、「毎日このノートにメモすること。そうすれば 2 年後にはひとつの作品が書ける」²⁹⁾。「2 年後に作

品を書く」という思いは、40年5月完成の『異邦人』として実を結ぶ。38年末ごろから作品のイメージは徐々に具体化し始めたが、実際にカミュが執筆を開始したのはいつ頃のことなのか。まず言えるのは、『幸福な死』を推敲しながら別作品を執筆したとは思えないので、少なくとも39年3月以降のことであろう。そこで同年7月25日付クリスチアーヌ・ガランド宛書簡に注目したい——

僕は〔…〕仕事に追われているんだ。たった今『カリギュラ』を書き終えたところだ。ひどいものだよ。それでも僕にはこれ以上のことができる気がしているんだ。修正もしなくては。僕は土曜に母の家に引っ越して小説を書くつもりだ。時間がかかるだろうな。³⁰⁾

アブーはこの書簡にもとづき、39年夏にはカミュが『異邦人』の創作準備に入ったと判断した。そこで、同時期のカミュの活動について見てみよう。カミュは38年初秋「アルジェ・レピュブリカン」紙にジャーナリストとして就職し、同年10月6日から翌年10月28日まで延べ387号に携わり、39年9月からは姉妹紙「ル・ソワール・レピュブリカン」の編集長も務めていた。カミュはもともとジャーナリズムに没頭する気はなかったものの、次第に生活は多忙となり、創作活動に十分な時間を確保することが困難になった。それでも39年5月には『結婚』を出版するなど、なんとか新聞の編集と執筆活動とを両立させていたようだ。経済的な理由から母親の家で暮らした39年9月から11月までの3カ月間は仕事がかどっていたようで、10月6日にはフランシーヌ・フォールに「熟慮の末に、僕は（あえて言うなら）小説に取りかかるつもりだ」と伝える。もっとも実際に着手したのは、小説ではなくエッセイであったことが翌日の書簡に次のように記されている——

昨日、僕は本当に書き始めた。小説から書き始めるつもりだと君に言っていた（そして自分に言い聞かせていた）が、不条理のエッセイに着手したよ。こちらのほうが小説よりずっと練れていたしね。ひとつの章（少なくともその下書き）を書きあげた。ドン・ファンについてだ。³¹⁾

当初執筆は順調だと思われたが、11月24日、カミュはフランシーヌに打ち明ける——「昨夜、僕は不条理についてのエッセイを書き始めた。〔…〕しかし

30分したらすべてが崩壊した。〔…〕僕にはこれは書けない」。そして5日後、「執筆はあきらめた」と³²⁾。アブーは、すでにこのころ『異邦人』の第1章を最終稿のかたちで書いていたというが、この様子では小説を執筆していたか大いに疑問である。

「ル・ソワール・レピュブリカン」紙が1940年1月10日に発禁処分になると、カミュは多忙な生活から解放されて、「不条理についてエッセイを書き、初稿の終わった戯曲を仕上げ、さらに小説を書く時間までできた」³³⁾。同年初頭、オランに住み着いたカミュは、クリスチアーヌ・ガランドの弟ピエールとその義兄ラウル・ベンスーサンがアラブ人と浜で喧嘩になったという話を聞かすが、この事件が『異邦人』の殺人へとつながる喧嘩のエピソードの着想源となった。ここにいたって「母親の死」「葬儀と埋葬」「アラブ人との喧嘩」という『異邦人』第1部における主要エピソードが揃ったことになる。しかし、カミュは作品を仕上げるために集中できる場所を必要としていた。「さまざまな愛情、さまざまな情熱、〔…〕幾人も女性に引き裂かれて過ごした」オランに耐えられなくなっていたカミュは、ついにはアルジェを去る決意をする³⁴⁾。パリに到着したのはアルジェを去った2日後、1940年3月16日であった。パリでは「パリ＝ソワール」紙で編集秘書として働いたが、体力は小説のために温存しホテルに引きこもる生活を送り、『幸福な死』の草稿など利用しながら執筆をつづけ³⁵⁾、4月には『異邦人』の4分の3を仕上げ、5月1日ついに作品は完成する。

以上の概観から、あくまでも推測ではあるが、小説に取りかかりたいという気持ちは39年夏ごろから持ち続けてはいたものの、実際に『異邦人』の執筆に着手したのは多忙な生活から解放された1940年に入ってからと見なせるのではあるまいか。

結 語

残された数少ない資料をもとに『異邦人』の創作過程の再構成を試み、ひとつの仮説を提出した。一見すると『手帖』のかなり早い時期から『異邦人』の先行テキストが現れているかのごとくであるが、その多くは『幸福な死』の執筆・推敲のために書かれたもので、『異邦人』に使用する意図のもとに記されたメモはわずかであった。これらのメモは、作家への足がかりとなるはずの作品

を出版すべく、カミュが鏝骨した姿を我々に伝える。結局『幸福な死』については挫折を味わう結果となったわけだが、この苦心の過程を経たことで、カミュは小説で表現したいことをより鮮明にしえたのではあるまいか。そしてその創作意図が確固たる実質をそなえたからこそ、『異邦人』は『幸福な死』のように推敲を繰り返すことなく、短期間に一気に呵成に書き上げられたのだと思われる。

註

- 1) «Présentation de *L'Étranger*», in Albert CAMUS, *Théâtre, récits, nouvelles*. Édition établie et annotée par Roger QUILLIOT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962 [nouvelle éd. 1967], pp.1912-1919.
- 2) 『手帖』はカミュが1935年から1960年までつけていたノートのことで、大学ノート9冊分 (*Cahiers I-IX*) である。それぞれのノートは、*Cahiers I-III* が *Carnets I, mai 1935-février 1942* として、*Cahiers IV-VI* が *Carnets II, janvier 1942-mars 1951* として、*Cahiers VII-IX* が *Carnets III, mars 1951-décembre 1959* として、それぞれ1962, 64, 89年にガリマール社から刊行された。ただし本稿では『手帖』からの引用はすべて以下の版による——*Carnets mai 1935-décembre 1948*, in Albert CAMUS, *Œuvres complètes II (1944-1948)*. Édition publiée sous la direction de Jacqueline LÉVI-VALENSI, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2006, pp.795-1125. なお『手帖』のメモは、すべてに日付が記してあるわけではないので、訳出引用にあたっては筆者による通し番号を併記する。
- 3) 後2者の出典は以下のとおり——Pierre-Georges CASTEX, *Albert Camus et «L'Étranger»*, Paris : Libr. José Corti, 1965 ; «Notice de *L'Étranger*», in Albert CAMUS, *Œuvres complètes I (1931-1944)*. Édition publiée sous la direction de Jacqueline LÉVI-VALENSI, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2006, pp.1243-1261.
- 4) *Carnets*, op. cit., p. 800.
- 5) Voir *ibid.*, p.814, p.816. 1937年4月付, メモ64「物語——弁明を望まない男。人が勝手に作りあげる観念のほうが、彼には好ましい。自分の真実を意識しながら、独りで死んでいく——慰めの虚栄心」。1937年6月付, メモ73「死刑を宣告された男のところに、司祭が毎日通ってくる。[...] しかしそのたびごとに、男にはこうした安易な救いを嫌い、自分の恐怖心を噛み締めようとする抵抗心がうまれる。彼はひとことも言わず、目にいっぱい涙をためながら死んでいく」。

- 6) *Ibid.*, p. 824.
- 7) «Présentation de *L'Étranger*», op. cit., p. 1915.
- 8) Jean SAROCCHI, «Genèse de *La Mort Heureuse*», in *Cahiers Albert Camus I. La Mort Heureuse*, Paris : Gallimard, 1971, pp. 11-12.
- 9) Voir *Carnets*, op. cit., p. 834. 『手帖』のなかで初めて『幸福な死』という言葉が使われたメモである。
- 10) メモ 36 については、同上 807 頁を参照。メモ 64 とメモ 73 については、註 5 参照のこと。
- 11) カステックスは、『異邦人』といっそう直接的にかかわるメモとして、1938 年 5 月のメモ 119 を例に挙げる。さらに彼は、同メモはカミュがマランゴの養老院を訪れたときの出来事をもとに記されたと、またこのとき養老院で亡くなったのはカミュの祖母であると断言するが、明らかにこれは誤りで、カミュが養老院へ行ったのは兄リュシアンの子の葬儀のためであった（ちなみにカミュの父方の祖母は 1893 年、母方の祖母は 1931 年に死亡）。Voir «Notice de *L'Étranger*», op. cit., p. 1244.
- 12) カステックスが論じたときはまだ『幸福な死』が刊行されていなかったため、このような見解を示したと思われる。
- 13) Voir Jacqueline LÉVI-VALENSI, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier (1930-1942)*. Édition établie par Agnès SPIQUEL, Paris : Gallimard, 2006, pp. 11-12.
- 14) 「僕は土曜に母の家に引っ越して小説を書くつもりだ。時間がかかるだろうな」(cité par Olivier TODD, *Albert Camus, une vie*, Paris : Gallimard, 1996, p. 221)。
- 15) ピアは『異邦人』の原稿をマルローに読んでもらうために、彼の弟ロランに託していた。原稿を読んだマルローは、太陽とアラブ人のナイフとの結びつきを書き足す必要があることや、海にかんする描写を凝集させることなど、いくつかの技術的批評を記した書簡をピアに送った。マルローの批評に対してカミュは次のような返事を書いている——「彼のほかの批評も正しい。第 1 章は他のものより 1 年早く、パリで執筆されたのだから。たぶん書き直さなければならぬだろう」(*ibid.*, p. 280)。
- 16) Voir *Carnets*, op. cit., p. 844.
- 17) *Ibid.*, p. 814.
- 18) *Ibid.*, p. 815.
- 19) *Ibid.*, p. 816.
- 20) Voir *ibid.*, pp. 810-811. メモ 49 「パトリスは死刑囚の話をする」。メモ 50 「6 つの話——輝かしい遊戯。贅沢。/ 貧民街の話。母親の死。/ 「世界をのぞむ家」の話。/ 性的嫉妬の話。/ 死刑囚の話。/ 太陽のほうに降りていく話」。
- 21) Voir TODD, *op. cit.*, pp. 155-156.
- 22) Voir *Carnets*, op. cit., pp. 822-827.
- 23) Voir Herbert R. LOTTMAN, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne VÉRON, Paris : Éd. du Seuil, 1978, p. 187. ロットマンによると、このと

きウールゴンに見せた原稿は第1稿で、1938年4月のものと思われるという。

- 24) *Correspondance Albert CAMUS – Jean GRENIER 1932–1960*. Avertissement et notes par Marguerite DOBRENN, Paris : Gallimard, 1981, p. 29. この書簡集には235通の書簡が収録され、うち112通がカミュの書簡、123通がグルニエの書簡。グルニエはカミュからの書簡をすべて保管し、カミュの生前にタイプ複写までさせていたが、カミュのほうは1939年10月30日に、グルニエのものを含むトランク2個分の書簡を焼却してしまった。したがって、32年5月20日から40年5月のグルニエの返信については内容を推測するほかない。
- 25) Voir LOTTMAN, *op. cit.*, p. 188.
- 26) Voir *Carnets*, *op. cit.*, pp. 852–853.
- 27) Voir *ibid.*, pp. 859–861.
- 28) Voir *ibid.*, p. 863.
- 29) *Ibid.*, p. 850.
- 30) TODD, *op. cit.*, p. 221.
- 31) *Ibid.*, pp. 207–208.
- 32) *Ibid.*, pp. 215–216. 1939年11月26日と12月3日付の書簡。
- 33) *Ibid.*, p. 221. 『シーシュポスの神話』『カリギュラ』『異邦人』の不条理3部作のことである。
- 34) Voir *ibid.*, p. 222.
- 35) オランにとどまっていたフランシーヌに『幸福な死』の草稿を送ってくれるように頼んでいる。これは『異邦人』にふたつのエピソードを転用するためだった。Voir *ibid.*, p. 238.